

組織行動研究

No. 21

編集後記にかえて

法則定立的か、個性記述的か。

パーソナリティのように、複雑で、多様で、多面的なもの。而も、一つの統一体として、中心(自我)をもち、重層的なもの。而も、生物的、文化的基盤をもち、それなりの生活史をへているもの。

このようなものを研究するには“何を”，“パーソナリティのどこを”研究しようとしているのか？ そのために“どういふ技法”をとろうとしているのか？ 全体性を重くみるのか、客観性・公共性を重視するのか、などをよく考え、弁えておくことが必要である。

このような次第で、パーソナリティ研究には、歴史的にかなり対照的な二つのアプローチがある。その一つは「法則定立的」(nom-

othetic)な方法であり、他の一つは個性記述的(idiographic)な方法である。

前者が、いわゆる科学的アプローチであり、パーソナリティの中の普遍的な法則だけを扱う。一方、後者は人間の独自性を扱う分野であり、歴史・芸術・伝記などから研究される。

前者は「要素」の心理学であり後者は「構造」の心理学である。

前者は“分析と因果的説明”を行い、後者は“構造”を理解する。

著者は30年来、パーソナリティの研究を行ってきたが、いつも、この両者を併用してきた。というのも、パーソナリティの研究には、つねに、そのような視点が必要であり、そのようなアプローチが不可欠だからである。

それは、例えば「WAI」という一つの技法の開発についてもあてはまる。

著者は日頃、このようなアプローチを、俗に“ヨコのノーマティブ”，“タテのノーマティブ”或いは、又，“ヨコの研究”“タテの研究”などと称している。

「WAI」に即していえば、そこに書かれた20の反応は、一人の人間が、自分をどのようにみているかということを見わたしたものである。

そして、それを読むことによって、その独自の個人が、“どのよう

な構造をもって存在しているか”を理解することができる。

これが“タテ”のアプローチであり、ローゼンツワイク(Rosenzweig)のいう「個人力学」(idiodynamics)である。

それに対して、多勢の人に云ってもらったセルフ・イメージをバラバラにして、整理・集計し、そこにみられる法則をみつけるのが“ヨコ”のアプローチである。

これは、パーソナリティの科学的研究であり、法則定立的研究である。

そして、このような、いわゆる「保険統計的」研究は、独自の個人を「共感的」に理解するための基礎になる。

前置が長くなったが、組織行動研究第16号 No. 25 WAI 技法を用いた自我の実証的研究(1)、同第19号 No. 28 同(2)、同第20号 No. 29 同(3)は巻末の事例を除いて、このような法則定立的研究である。これでやっと“タテ”の研究を行うための基礎固めが出来たという次第である。

そこで、次号からは、いよいよ待望の“タテ”の研究にうつる予定である。

そして、SCTも加えて、“一人の個性をもった、独自の個人、そのトータル・パーソナリティの把握を試みる”つもりである。

榎田 仁

慶應義塾大学産業研究所社会心理学班研究モノグラフ

組織行動研究(第21号)

責任編集 榎田 仁・南 隆男

KEIO STUDIES ON
ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND
HUMAN PERFORMANCE No. 21
MARCH 1992

〒108 東京都港区三田2-15-45
発行 慶應義塾大学産業研究所
電話 03-(3453)-5640(直通)
<平成4年3月28日>

〒104 東京都新宿区高田馬場3-8-8
印刷 株式会社国際文献印刷社
電話 03-(3362)-9741(代表)
<平成4年3月21日>